

地殻不均質温度構造から直接的に発生し、ブーゲ異常に反映する重大な力

The power which reflects Bouguer-Anomaly and is generated from underground heterogeneous structure

間瀬 博文[1]

Hirofumi Mase[1]

[1] なし

[1] free

<http://homepage3.nifty.com/hmase/>

ここ 2 年間重力に関する研究を集中的に行った。その成果として、万有引力はある条件下において面白い効果を発現することが理論的に説明できるようになった。それは、中心部が低温で周辺部が高温という 2 温度部分で構成される円盤(2 温度回転円盤)である。理論的には高温部に爆発的な向心力が発生する。むしろこの現象は既知の、熱平衡とかの熱エネルギーが引き起こす現象とは無縁である。

スケールの身近な塵旋風を例にとれば、概ね熱せられた校庭の空気の一角に比較的冷気が紛れ込むだけで 2 温度回転円盤が発生することが可能となる。冷気を取り囲む暖気が冷気を周りから締め上げる。具体的には冷気をはさんで対面する暖気同士が引き合い距離をつめようとするのである。結局暖気は冷気の周りを回転し始める。比重が大きい冷気は身動きがとれない。まず向心力ありきであるからそれに見合う回転をしない部分は即座に中心方向に引き寄せられることになる。回転しながら次第に中心方向に移動する。すなわち渦である。地面を掘ることはできないので、押し寄せる暖気は冷気を押し付けながら上昇してゆくことになる。

すでに日本気象学会(2004 春秋)ではミンダナオドーム(エルニーニョ)・温帯低気圧(台風)のメカニズムについて説明した。気象の顕著な現象の主原因は気圧傾度力やコリオリの力とは無関係であることを説明した。それゆえ竜巻・塵旋風・火炎旋風についても明瞭な理解が可能になった。エルニーニョについては今年末の発生を予測している。

日本天文学会(2004 春)にて銀河中心核のブラックホール現象をあげたからといって、2 温度回転円盤は空想や妄想の産物ではない。それは宇宙・空・海そして身近な自然現象の中にも潜んでいた。自然界を支配する重力にからむ仮説だけに顕著な自然現象の原理を矛盾なく説明ができ、災害防止に繋がる成果も期待できる状況になってきた。ただ、市井の個人の研究でもあり実験により正しさが直接証明されない限り理論が黙殺されてもしかたないであろう。ところが、拍子抜けするほど簡単な室内実験によりほとんど証明されてしまった。現在、万人が再現できる実験装置として改良中である。

低温部を挟み両側に位置する高温部が互いに引合い回転に至ろうとする現象は、低温部と高温部の密度がかけ離れてさえいなければ、ガス・液体・固体を問わずどんな物質中でも起りうる。黒潮の大蛇行も太陽のフレア現象も天体表面の 2 温度回転円盤であると考えられるが、天体内部も例外である理由はない。つまり地球内部においても、その温度分布次第では 2 温度回転円盤が発生しているはずである。

地震学・地球物理学では、地震波トモグラフィーにより地殻内の温度分布が推定できるようになったことで、それと活断層や震源及び震源断層との関連を探る研究が盛んである。すでに、各研究機関の研究の成果によって高温域内部では断層は分布せず、その周辺に分布しているという一般的認識が形成されている。また、近年の顕著な内陸型地震は高温域にはさまれた低温域で発生していたことがおしなべて明らかになりつつある。

高温域同士の引き合いが本当にあるとすれば当然地表の重力データに影響を与えていると考えられる。幸いなことに地下構造を知る上で重要な意味を持つブーゲ異常のデータが容易に入手できる時代になった。ブーゲ異常(単位はミリガル)とはその値が+で大きい場所ほど重い物質が分布し、逆の場合は軽い物質が分布しているという、ジオイド面下側の単純な岩石の不均質分布を表すとされている。

ある断面の温度分布図としては岡山大学地球科学科が公開されている中国四国横断面での地震波の速度変化分布図を利用した。その切断線上のブーゲ異常値は東京大学出版会発行の日本列島重力アトラスを利用した。温度分布図上に理論上発生すべき高温域同士の引き合いをベクトルで記入する。これによる地表のある点での重力異常は真下方向にあるベクトルの鉛直成分の合力である。この合力が描く曲線とブーゲ異常の変化曲線は驚くほど調和的である。ブーゲ異常は岩石の不均質分布だけでなく、むしろ 2 温度回転円盤を直接的にモニタしていると言って良いかもしれない。地球の地下においても高温域同士の引き合いが起きている可能性が高まった。

